

直感（４）

1.地球に住む、地球から生まれた動物たち。彼らは皆、太陽に生かされる地球のその原因を自らに流し、地球と共に、生命の変化に乗る。地球に居る以上、どんな動物も、その活力源は太陽の光。生命本来の全ての原因を持つ太陽の光によって、動物たちは、自然にムリなく生を繋ぐ。そこに、不自然さは生まれない。

そのことが教えるのは、太陽の光を避けて生きる動物が存在すること自体、この地球にはあり得ないということ。そうなってしまうその現実が、地球自然界にとっては実に危うい原因であるということ。そのことを思考の基本に組み入れる。それを普通とすることで自然に為し得ることは、一生命としての、地球のための仕事となる。

蛇や猫、コウモリなどを通して知り得るそのことが原因となって、動き出すもの、浄化され出すもの。そこに在るのは、夜行性動物が秘める、その姿無き本性の性質（意思）からなる破壊力（カラスも本質は同じ）。太陽の光を浴びながら普通に生命を生きる動物たちは、彼らの非地球の意思によって侵され、負担を覚えながら、無くてもいい神経を働かせて生きる。

その夜行性（夜に脳を活発化させる）動物の始まりは、およそ 2 億年前のある海棲動物から。その後、数千万年前に、彼らの生命の意思の力添えもあって、陸上での動物世界に、同

HP「無有日記」

<http://www1.odn.ne.jp/mu-mew/>

質の本能を備える他の動物が誕生する。そのどれも、中身は、停滞と破壊を本分とする、異様な生態の持ち主。地球の無生命化を企てる存在は、動物の次元から、地球自然界の混乱と衰退を生み出していく。

2.人間世界のそこでの生の原因が、地球(生命)本来を基に変化・成長していくことの、その地球規模の重要性。形ある全てのその元となる形無き原因の世界は、ありのままの事の本質であり、その変化無しには、何をしても、それは何も変わることの無い何かでしかない。そこに動植物たちの不自然さや、人間の心身の不調・不健全があれば、それらに共通する原因を遡り、それを確実に浄化することで、地球も人間も、そのままていられる。しかしながら、夜行性動物関わりのその独特の次元が、それを阻もうとする。

現在の人間の意識が触れ得るところでは、とどのその本質の危うさを、理解の域に収める(他にもその次元の存在は居るが…)。彼らは、発する意識(超音波)に異常な重たさに乗せ、海の中の風景を、非生命の原因で染める。くじらとは対極の停滞型の粒子となるそれは、対象の動きを容易に鈍らせ、彼らはその混乱振りを愉しみ、獲物とする。水銀の類も平気で取り込み、その異常能力の材料にそれを活かす。地上の夜行性動物は、彼らの保護下に居るとも言える。

地上に生きる人間の多くは、心ある原因からは程遠い、形ばかりの結果人間。そんな中でも地球が嬉しい原因そのもの

を生きる人間は、とどに、異質感の対象として難なくマークされ、不自由さを強いられる。とどは、超音波を活かして、同質の存在(動物、人間)と意を合わせて、心ある人間のその形無き想いの具現を潰す。蛇もカラスも、蛇系の人間も、とどの意識と仲が良い。

とどは、遙か昔から、この地での人間経験を実践する生命たちの動きを把握する。人間世界に接近した蛇も、ねずみも猫も、そこには、彼らの意思が絡む。無有日記の在るこの時代、夜行性の元祖的存在とも言える彼らの悔しさは、かなりのものである。

3. 日没後に、脳の働きを元気に、活動的になる、夜行性動物。それだけを見れば、それは個性として捉えられるが、彼らには、普通に生きる人間や動物にとってとても脅威となるものが有る。そこには、水銀の原因となる次元も絡み、夜行性動物がいかに非生命的な本質を備えているかを、それは現す。

夜行性動物全般には有って、そうではない動物には無い、回虫。太陽の光を生きた活力源とする動物(人間)は、それが体の中に入り込んでも、健全さを基本とする細胞がそれを外へ出そうとする。ところが、夜行性の動物(人間)にはその必要性が無く、その回虫を体の中に大事に飼う。そして、その回虫が、人間の理解を大きく超えた、漫画のような負の威力を発揮する。

事の表層の理解とその材料でしかない知識や情報を増や

し、動き(変化)の無い形式やきまりの中でそれらを反復活用するばかりの日々を良しとする、そこで生きる人間の、妙な価値認識。状況的にやむを得ない事実として受容すべきこともあるが、全く違和感も無く当然のようにその様を馴染ませているとすれば、その人は、夜行性の本質を備えていると言える。彼は、昼間は、頭(思考)と本心を切り離し、形ばかりの生を、脳本来を眠らせるようにして生きる。夜は、抑え込んでいた感情を前面に、それに思考を付き合わせるようにして、自己満足の時を過ごす。夜行性人間の典型である。

蛇の本性と一体化するような価値観(宗教観)に支えられる、この地の社会環境。そこでの数の力は、蛇と同質の夜行性人間のためのそれとなり、太陽を避け、あたり前に健康でいる平和な原因を力無くさせる。彼らと共に生きる回虫が、それを支持する。

4.その異様で、思考が全く及ばない生き物は、そんな人間の中に住みつつ、他との融合(交流)を強め、自分たちだけの世界を築く。彼らは、体内に同じものを持たない人間を瞬時に感知し、どんよりと重く非生命色の強い(粒子を乗せた)超音波をそこへと流し込み、攻撃する。静電気脳も彼らの道具として使われ、人間の無意識の意思は、彼らと同一化する。夜行性の人間は、回虫がその人となり、その人が、回虫となる。

人知れず心ある人の生きる原因を破壊し続ける人間は、人間という姿のロボットを操る回虫と一緒にそこに居て、その全

に乗せる。心身に染み込んだままの不要な原因も、彼らは浄化してくれる。そのことを大いに活かす。無有日記の原因との融合をベースに、岩塩との付き合いを活発化させる。

地球に住む生命たちは皆、太陽の光に生かされ、地球に支えられて生きる。当然、人間もそう。そこでの生命力の源は、地球が安心する、水と空気と、地中(地球)からの植物。その生の基本を、普通に大切にする。そして、「直感」の後に続く風景を、共に楽しむ。(by 無有 4/17 2019)

もうその原因には、これまで書いてきている動物たちの影響の他、肉食が深くそれに絡んでいると考えて良い。猪(豚)を操ることなど、フクロウにはた易い。

同居することで猫化する脳もあれば、肉食を通して猪化する脳もある。もちろんそれらは、無自覚の出来事で、その意識もなく人としての生は放棄される。そこに蛇絡みの価値観が加われば、心ある時空はどこまでも縁遠くなり、ムカデやコウモリにも好かれ、回虫とも仲良しになる。

感覚的にそれらの原因に反応できれば、「直感」関わりのEWを楽しむ。フクロウやムカデ、猪繋がりやで侵された地球本来の物質(テルル 104、チタン 44、ルビジウム 74)を活かし、そこから、歪で非生命(非地球)的な粒子のその原因の影響力を処理する。単純なアプローチでも、いくつかの(無有日記の)フレーズを添えても、それなりに効く。「直感」の時からは、右手にも活躍してもらおう。

食の風景における豚肉のその活用は、とても幅広く、細部に渡る。その理由は、猪(豚)の感情とその執念。それなりの知能を持つ夜行性動物の本性は、想像以上に強烈で、その災いの原因は、体全体に浸透する。そしてそれは、食材には欠かせない味(うま味)へとその姿を変え、蛇系の人間の世界で重宝される。そのことを通して濃度を高める脳の猪化は、不安定な世を安定させる貴重な材料となる。

岩塩があれば、他は何も要らない程、体が嬉しい素材(食材)は活き、細胞たちも、滑らかに、健康・健全の原因を変化

てを、彼らが好き放題行っていると思ってよい…と、読んでいて誰もが感じる、その嘘八百円相当の奇想天外振りの内容。当然である。あり得ない話にも程がある。

しかし、形無き原因の世界でのみ把握し得る、形ある世界のその実となる事実という事実がある。それが限り無く意味不明なだけ。(これまでの無有日記の原因と融合している人は)手のひらを立てて、回虫のEWを自由に遊んでみる。周りのそれらがざわめき出す。ロボット(人間)も、それに違和感を覚えずには居られなくなる。気づけば、どこかが動き、本来へと変わり出す。

回虫は、夜行性の中の夜行性。太陽の光が嬉しい生命たちのそこでの普通は、全て忌み嫌うもの。人間にも、健康・健全の原因は望まない。細胞が辛くなるはずの精白された穀物(米、小麦 etc.)も動物食も、海塩も白砂糖も、彼らには何より嬉しい腐敗型の食物。夜行性の人間の普通は、回虫の思惑通りに、生命としての異常をそれとする。

5. 数百万年前、この地で人間経験を再開した生命たちは(「再生」)、くじらを通して、そこに非地球の意思を持つ海棲哺乳類動物が存在することは把握していて、その不穏な威力によって様々に影響を被ることも承知で、生命としての人間を表現する。だからこそ、ここに新たに通るべき道があり、地球自然界のその本来の在り様のために、生命たちは、この「直感」の次元を大いに活かす。それは、くじらとの約束。

とどにももちろん回虫の類は居て、それは、彼らの破壊力のある超音波と共に独特の次元を生み出し、陸上での回虫の営みを把握するようにして、腐敗型の空間を色濃くさせていく。

生命たちは、それぞれがとどの次元にマークされるようにして、遙か昔から、停滞を生み出す重たい超音波を注がれ続ける。そして現代、彼らに向けられるその超音波に誘われるようにして、同質の人間が彼らひとりひとりにまとわりつき、そこで回虫の威力の活躍により、生命たちの心ある動きは封じられる。その流れの中に、この今は在る。その超音波による枷と、回虫関わりの負の原因を外し得る時を、無有日記は創り出す。

災いをもたらす蛇系の人間たちも、回虫繋がりでとどから支援され、陸上での夜行性動物との融合も密に行われる。そこには、水銀の原因(意思)同士の共振も為され、結果と形式を重視する夜行性の彼らは、無意識の凶悪さをそれで強め、攻撃・支配欲を具現化させる。心ある柔らかな人は、理由も分からずに痛みを覚え、要らない頑張りと不自由さを余儀なくされる。

太陽の光の力をこの上なく大切にする人。それを尽くどこまでも拒否する人。そのどちらの世界にも居るとどを、EW の風に乗せて宙に浮かす。空飛ぶくじらが、雲の上でうたた寝をする。

猪。肉食の風景を安定させるために生み出された豚の、その本質は猪と同じで、凶暴さも怖れも受け継いでいる。その感情を固定させるための物質(ルビジウム 73)もそこに在り、普通の人には、それを摂ることで、猪の本性のその原因を(ルビジウム 78(80)として)体内に溜め込むことになる。そのことによる影響は、恐ろしさの一言である。

秘めた非人間性を隠すために嘘(の原因)を生きる人間には、肉食は、そのための格好の材料となる。しかし、共に生きる動植物たちと自然に融合しながら、生命本来を生きる普通の人には、それは強烈な痛手となる。

猪の獰猛さ(凶悪・凶暴さ)と怯えの原因は、体の隅々にまで行き渡り、脳は、不安で一杯になる。その気もなく見た目や体裁ばかりを気にするようになり、それじゃいけないと思考を忙しくさせて、感情の起伏は大きくなる。いつのまにか、傍らからは、攻撃的で怖い人と思われる。

肉食(豚肉)は、強力な獸的感情を備える猪との(細胞レベルからの)融合が、そこで為されていると思ってよい。それは、太陽の下で生きる人間には、とても辛い現実。本来あるべき実践を普通に、仕組まれた原因(作られた性質)を切り離して、生き直しをする。猪になることはない。

8.健康的で平和な原因を普通としていても、何かの拍子に感情が高ぶり(荒くなり)、いつもとは違う自分を経験する、素朴で普通の人たち。時にひょう変とも形容される状態に陥ってし

姿を見せた、それと質を同じくする人間は、(夜行性を基とする)封建的構造の強弱を上手く操りつつ、恐怖心からなる生を基本とする、心無い人間のための世を生み出していく。

動物の中では、猪がその性質を際立たせる。そうである荒々しい感情も、その分強烈な怖れを持ち合わせているということ。彼らは、当然それを知らない。そこには、夜行性独特の個性が備わり、腐敗型の方向性を堅固にするためのある物質も、そこで仕事をする。

7.「直感」は、違和感となるべく対象の幅を増やし、それらをまとめて面倒見るといふその余裕の中での何でもない原因の動きが、それをさらりと形にする。感情も感覚も、人間の次元には留まらずに自由で居て、動植物たちのそれ(意思)がそこに入り込むようにして、その生命としての直感の時は自然に創られる。

経験枠や期間限定の価値観の中に居ては、永遠に直感を経験できない。その本質が夜行性である人間の世界にも、それは無い。直感には、普通感覚で大切にされる、そのための原因の成長が在り、猫や蛇、カラスと融合する空間には、それとは対極の、停滞と退化の原因が在る。その変化とは無縁の次元で、心無い人間たちは、優しさや思いやりと同じように、直感を、心ある振りの道具に使う。

彼らが、素朴で柔らかな人たちのその心ある感性を潰すために、狡賢く、巧妙に仕掛けたのが、肉食である。豚は、元々は

6.太陽の光と仲良く、地球と共に自然体の生を生きる人。日没後に動き出す不自然さを普通に、太陽を遠ざけて生きる人。この世には、二通りの基本生態があり、それは人間の世界でもそう。この時代には環境的に難しいものがあるが、元々人間は、昼普通に元気に動き、日没と共に、健やかに脳を休めることを本来とする。

昼間に体を動かしているようでも、中身は人間本来のそれではない、夜行性の人間。その影響の強い環境の中に居ても、生の基本は、生命として大切にされる。機械的に知識を増やすことや、画一的な言動を連ねることは、脳の不健全さ(脳眠中)の現れであるゆえ、そのことを知り、その原因を変えていく。地球本来は、そこを通らないと、何も見えては来ない。

そして、「直感」で新たに触れ得た次元とそこでの EW を通して実感の域となった、回虫への体験的な認識。太陽を基とするとそれは分かるように、この地上には、回虫を自分の分身のようにして体内で育てる人間と、そのことから全く縁遠いところに居る人間がいる。

前者は、数万年前まではこの地球には存在しなかった生命。それ以前には無かったものを体内に潜めて、彼らは、嘘の人間を生き始める。その数の増え方と、そこでの生の潰し合いは、まさに蛇譲りの本性の所以である。

後者は、地球感覚の生をありのままに生きる、遠い昔からの人間と、彼らと融合する人たち。彼らは、人として、生命としての原因を変化に乗せて、太陽の光をそれに重ねる。くじらた

ちの友である。

本心が太陽を嫌う回虫の持ち主たちは、虫のように怯えの中に居て、それゆえの敏感さと凶暴さを力に、支配欲を強める。夜行性特有の非生命力で人の心を抑え込み、不安と怖れでそれを囲い込む。

太陽の心のような人間は、この「直感」の時を通り抜けて、これまでのままではない未来へと時を繋ぐ。この地球に本来は在ってはならない夜行性動物(人間)の、その異常過ぎる負の原因を楽しみながら癒す。回虫たちをぐるぐる回して、結び目をいくつも作って遊ぶ。

7. 体内に自分と同じ姿のもの(仲間)を持たない人間の、その生きる自由を押し潰そうとする、回虫。備える本性も摂る物も非生命のそれである人間の中に住み続ける、その体の主のような彼らは、他には無い破壊と征服の意思を際限無く通し、人間の無意識を操りつつ、その威力を発揮する。回虫とは無縁の心ある人は、無自覚に脳を病まされ、胃腸を侵されて、鼻や目に不調を抱かされる。この世では、回虫の凶悪さとその負の力は、全く別次元のそれとして捉える。

そこに関わる、地球本来からかけ離れた不安定な水銀。回虫は、その原因を取り込み、他のところに居る同質・同類のそれと交信(交流)しながら、網の目のように超音波を発し、時空を我が物顔で支配する。どんな生き物であっても、辛い現実へと向かわされてしまう、水銀 199(202, 207)。それを活

孫のような滞りの原因は活かされる。(地上の)人間の居る空間への地中からの攻撃には、ムカデのその非生命的な性質からなる湿気(の原因)が、病原菌のようにして、人間の次元をすり抜けて利用される。

6. 仕える人の言うことだけを正しさとして守り、感じるままの正直さを無くして画一的に生きることが普通となっていた、この地の人間社会。その姿が成熟していく流れの中、この現代に至り、夜行性動物による負の影響力が最も人間の心身深くに染み込んだのが、肉食(豚肉)を通してのそれである。

その背景には、凄まじい限りの破壊の意思があり、強力な支配と抑圧の意思もそこで息づいている。肉食は、人の心を潰し、健全な空気感が生まれることを完全阻止するために、夜行性の次元から人間の脳に入り込む。猫やコウモリが、その姿を笑う。

人間は、元来、不安も怖れも無くありのままに生き、それがその意識もなく人のためとなって、互いは、あたり前に支え合い、生かし合う。しかし、その普通は、太陽の光を力に、自然体で生命を生きる人間の姿。世の無生命化を望む夜行性の次元に、それは無い。

夜行性動物を生み出した、非地球の存在の意思は、不安を力に向かう姿勢を強め、怖れを溜め込んだ分、その反動として勢い良く動き、頑張る感情を彼らに植え付ける。それは、凶暴さと恐怖心をひとつにしたような、獣的な本性(性分)。後に

5. 心ある人間の、その健全な感性を押さえ込むために負の力を発揮する生き物は、他にも居て、その中でも、ムカデの影響力は意外に強力である。彼らは、人間の住む地域に密に関わり、蛇と同じように湿度を強める。空間の風の流れを容易に滞らせ、不健康で不衛生な環境を生み出していく。

妙にじめじめした空気は、蛇によってその下地が作られるが、蛇の住みにくい場所では、代わって、ムカデがその役を担う。フクロウは、それを喜び、心を持たない人間たちも、それで生きやすさを覚える。湿度が雨季でもないのに 40%を軽く超える場所(屋内外)は、その敷地辺りにムカデがしつこく住み着いていると思っただけよい。

そこに猫が居れば、家の中での不健全さは猫が担うが、そうではない時は、濃密な静磁気(場)でもあるムカデがそれを任される。静電気も、夜行性(蛇系)の人間のそれに重ねるようにして増大させ、心ある柔らかな人が理由も分からず不調になるその姿無き理由でい続ける。アスファルトやコンクリートで地面が固められても、それによるそこでの通気性の悪さが、彼らには好都合となる。

形態の異様さからなるそこでの異常な作用は、最後方の部分に潜める、チタン 52(48)関わりの負の原因がそれを援護する。地球本来(44)からは程遠いそれは、人間の(思考レベルの)都合には上手く適合するものだが、地球(地殻)にとっでは、無くてもいい経験の重石役のようなもの。熱を通しにくい性質もそこに加わり、ムカデによって、その(アルミニウムの

かした彼らの、そのあり得ない負の作用は、どうにも浄化できない危うい現実のその土台でい続ける。

回虫を備える人間は、回虫と一体化したその奇妙な感覚により、健全・健康の原因を大切に生きる人間の、その自然な動きを簡単に感知する。そこから始まる、静電気脳の活動と、融合の主導権からなる、相手の原因(生命力)の押さえ込み。そのために、素朴な感性を備える人間は、何をしても、どうにもならない厳しい時を過ごす。

それが、無有日記との融合の時を経て、その風景は一変する。形ある結果や動きの無い形式を大事に、身を繕い、良い人を演じていた人間の、その嘘の原因に人は難なく反応するようになり、ここに来て、自らの原因も力強くしなやかに成長して、入り込まれ易かった隙間も、ひとつひとつ無くしていく。知ることが原因の変化に繋がる程、そこでの体験的知識は、生命本来のそれになる。

そして、回虫関わりの EW を可能とする時を、ここに迎える。「復活」「地球の真意」の後に「直感」が続いても、この 4 章が来るまでは扱うタイミングも無かった、回虫。理由の分からない不調や痛みの原因を更に深く浄化し、それらを外す。地球自然界も、必ずやそれに連動する。

8. 太陽の光から遠いところで生きる夜行性動物を主に、それと質を同じくする人間や他の動物の中にも居る、回虫。猫や蛇、コウモリはそうで、他にもたくさん居る。

それらに共通するのは、生の基本形が非地球であるということ。彼らによって、自然界はその調和を乱され、人間世界も、歪な生を生きる回虫人間によって、不健全さが蔓延する。

回虫と融合する無意識の意思に支えられた脳の働きを思えば、ご利益や依存(到達や願望実現)関わりの、その個人枠の次元で活躍する直感の類は、全て非生命のそれということが分かる。占いや祈祷などに長けた人の直感も、実に危うい回虫型。回虫が潜める(破壊型の)能力を存分に発揮できるというその凶悪さが他のそれを抑え、好き勝手に、自分に都合の良い空間を生み出していく。事の原因を無視できる人間も、皆回虫大好きの人間と思ってよい。

…と何度も回虫の言葉に触れていると、気持ち悪さも不快感も無く、どこか可笑しさの有る、間抜けな生き物のように思えてくる。それぐらいで行く。世は、回虫だらけ。回虫が猫や人間の体をかぶって歩いている。回虫ビームで、健全な感性を持つ人のその原因を壊そうとしている。たまには、鼻や口から出て来い、と呼び掛けてみる。出て来れたら、岩塩スープをお腹一杯飲んでもらおう。(by 無有 4/09 2019)

そんな中でも、彼らが徹底マークし、その動向の全てを不自由にさせて封じようとする、数百万年前にこの地で人間経験を再開した、数千の生命たち。彼ら生命たちは、人としての生を連綿と繋ぎ、蛇絡みの人間が誕生した後も、地球感覚を基本に、形無き原因の世界の観察と、それへの浄化をし続ける。

そんな彼らを放って置けば、自然界は、地球本来のそれへと変化に乗り、蛇もコウモリも猫も、存在し得る力を無くす。そうにはならないようにと、心を持たない形ばかりの人間たちが生み出されたわけだが、フクロウは、その仕事の最重要箇所を担う。心ある感性を普通とする人たちは、フクロウの、超音波と言うよりは超脳波とでも言うべきその能力に、完全に抑え込まれる。

夜行性動物の人間への影響は、大小様々にその深くまで及び、それは、心無い人を元気にし、心ある人からは、生きる力を奪う。身近なところでは、そのために猫が居て、人の意識の中には、蛇や狐が居る。フクロウは、それらの人間への影響を活かし、蛇色豊かな環境を応援する。蛇系の人間にとって、それほど心強いものはない。

それだけの能力を備えるということは、怯えも怖れも最大級であるということ。永い間にフクロウが身に付けたその異常な普通は、大きくその質を変えたテルル 130 という物質にも支えられ、秘めた恐怖心を極度の凶暴さに変える。その物質の地球本来(104)の仕事を考えただけでも、彼らの威力の程が分かる。

直感（5）

かくその動向に関わり続ける。カラスやコウモリとその感情を重ねる人間は、フクロウに思考を支配され、彼らもそれを望み、非生命的感情を都合良く強力にする。

病みの下地は他に任せ、自分はその上での操作の段を握る、フクロウ。猫も蛇も、彼らの能力(の次元)には絡めず、自分たちの働きかけが上手く利用されていることも分からない。カラスもトカゲも、気持ち良く思い通りに生きていて、その姿(結果)を思い通りに活かされている。

それは、猫が生み出す嘘の世界に生きる人間も同じ。彼らは、猫関わりで蛇ともキレイに融合し、狐やコウモリの本性をも組み入れて、フクロウが扱い易い性質そのものとなる。体裁(見た目)や形式への思い入れを活力源とする、夜行性の本質を備える(形ばかりの)人間は、そのことを何より嬉しい。広がりや繋がりへの責任も無く、胸を張って、自分らしさ(非人間性)を生きる。

4.夜行性動物たちが日々生を営む以外に関心を抱くのは、環境が自分たちにとって厳しいものへと変わり出すその原因の広がり、その性質を備える存在たちの動向。それが動けば、住みにくさへと繋がり、腐敗空間を維持できなくなる。停滞感と重苦しさが和らいでしまえば、回虫繋がりの方角性にもぶれが生じ、それぞれが備える特性の活発化も望めなくなる。彼らは、互いに争い、いがみ合うことがあっても、その優先事項に関しては、身を以て(命をかけて)協力し合う。

1.争いや隔たりの原因を知らず、ただそのままで安心と健康の時を普通に生きる、自然な人たち。その人としての在り様を嫌悪する存在が居ること自体、あり得ないことだが、彼らが、人間が経験してはならない夜行性動物との融合を普通とすることは、実に不可解で、不気味でもある。人間は、太陽の光の力をその生の源とするゆえ、それを不要とする夜行性動物とは、感情も性分も重ね合わせることはしない。

人間の居る空間に居場所を確保した猫の姿は、生命世界からは、大きな悲しみである。同じ場所に居るだけで、その気もなく脳の中に取り込んでしまう(染み込ませてしまう)、猫の本性。非人間性をその本質とする人は、それにより狡さと嘘を安定させ、心ある普通の人、訳もなく不自然さを馴染ませてしまう。猫との空間は、不安定を安定させる、非道の原因となる。

時に目にすることはあっても、基本的に密に関わることの無い、夜行性動物。蛇やコウモリとは一緒に遊ぶことが無いように、それと中身を同じくする猫やねずみとも、人は関わることはしない。狐も、その本性は夜行性動物の代表の域に入る。人間の脳とその生きる原因は、その異常な生態により簡単に鈍らされ、操られる(カラスやトカゲ類も、生態は違えど、質は同じである)。

地球自然界の自浄力を本来へと戻すためのその基本プロセスとして、何より重要となる、夜行性動物との融合からの回避。摂取する食物や価値観を、その次元から切り離し、地球の大地が安心する全粒穀物食と、生命としての人間本来(の普通)を大切にす。太陽の光に生かされ、地球自然界に支えられるそこでの姿は、夜行性の存在たち(人間、動物)のその非地球の意思を遠ざけ、その存在感を消失させていく。

2. 太陽の光を避けるようにして生きる生き物は、動物も人間も、腐敗型の原因をその生の原動力にするという、普通では考えられない姿をあたり前とする。それだからそこでは可能となる、回虫の世界との密な連繋。そのあり得なさは、まさに回虫が生の主導権を握るという、限り無く異様な世界。自分たちが存在し得るその非地球の原因に支えられて、それらは、存在そのもので自然界の生命たちの自由を押さえ込む。

夜行性動物の世界では、それぞれが思い思いに動きの無い重たい空間を生み出し、好き放題そこで破壊活動を行う。そんな彼らにも力関係のようなものがあり、その頂点となる場所に居る動物は、その何でも無い普通で、他の動物にとっての異常事態を簡単に作り出す。

直接関わりを持たなくても、意識するだけで自らの生命力が抑え込まれてしまう程の、そこでの恐怖の感覚。夜行性動物たちは、その存在の行動範囲には極力近づかないよう努め、身を守る。彼らの記憶の中には、ほんのかすかな物音をだけ

で自由を奪われた(捕えられた)経験が在る。

夜行性動物が備えるその非生命的な原因が違和感として伝わり出すと、自ずとそれとの融合経験でのそれが外れ出し、自浄力も活発化する。それは、その機会が失われたままだと、無自覚のまま、とても危うい本性の世界に巻き込まれてしまうということ。

彼らが皆苦手感を覚えるその同質の存在の威力から、直接・間接的に自由でいるためにも、身近なところでのそれらとの関わりは無しにする。夜行性動物(蛇、猫、狐 etc.)との融合は、心ある普通の人には全くの異次元空間のそれである。

3. その存在は、フクロウ。人間が抱くそれへの好印象は、見た目の大人しそうな空気感と、素朴さの漂う鳴き声から勝手に出来たもの。その実際の姿は、厚みのある荒々しさと頭脳的攻撃性を備える、酷く獰猛な動物。狩り(襲撃)には桁外れ的能力(超音波)を駆使し、他の夜行性動物が怖れる程の特殊機能で、完全なる支配を当然とする。彼らには、それが普通。その普通に触れないように生きるのが、他の動物の普通となる。

フクロウからは、人間の世界の性質は手に取るように把握でき、それぐらいだから、その質を操ることも難なく行う。多数の人間が蛇と同質・同次の脳であることも幸いし(利用でき)、人間が太陽の光による健全さを安定させることのないよう、彼らの脳の働きのその手前の原因の部分に入り込み、きめ細